



hina no marebito のまればと

千葉県大網白里市で不動産・建築業を営む大里総合管理はバイクで走行していた1人の大学生の命を作業中の不手際で奪った。平成8年7月2日のことだ。当時37歳だった二代目社長

日本の省庁や大企業の組織では「無謬性(むびゅうせい)の原則」が跋扈(ばくご)していると言われる。「ある政策を遂行する責任を負った当事者は、失敗したときのことを考えないし議論しない」というものだ。放漫のツケは大きく、無謀な開戦で310万人もの尊い命が犠牲となり、昨今では年金や社会保険制度が破綻、赤字国債が1000兆円超に膨らんだ。東京電力が福島第一原発で起こした悲惨な人災も、その一例にほかならない。

## 事故の教訓が生んだ「気づく訓練」

大里総合管理株式会社  
代表取締役社長

野老真理子さん  
(60)



の野老真理子さんは遺族に対し、最善の謝罪対応を心懸けるとともに「二度と同じ過ちを犯してはならない」と強く覚悟を決める。毎年「危機管理の日」を設け被害者の慰霊と安全を肝に銘じてきた。また、「環境整備」と称して毎朝オフィスの雑巾がけを励行、手の届きにくい隅は楊枝や綿棒で塵を取るという徹底ぶり。そこまでやると綺麗さが際立つ。これが同社の「気づく訓練」で、野老さん曰く「社員の反発は小さくなく無視する者もいたが、翌春に建設現場で火災事故が発生して以降、トップダウンが社内根付いた」と。

「大里さんはいいね。2階で社員さんが仲良く料理しながら食事ができて」と顧客に感心され、ワンディシェフのレストランを開業し地域に開放。「あらっ、ピアノもあるの？うちの娘は音大を出たけど楽器を弾く仕事に就けなかったわ」の声にはコ

ンサートの開催で応えた。今、大里にはこうした地域活動が250動いていて、社員1人ひとりが最低一つの事務局を担当。その他を大里に集うボランティアが担っている。

東日本大震災では、地域の有志を募り、会社のマイクロバスで被災地に生活物資を届け、炊き出しも行なった。その回数は約200回。石巻市立大川小学校で三姉妹を喪つた遺族にはトラック3台で雑壇を80組届けた。さらに大里では東電の「電力消費の3割を原発で賄う」考え方を覆させるために自社の「震災前電力消費の3割削減」を掲げ達成。夏はエアコンを扇風機に切り換え、冬は1時間おきのラジオ体操で身体を温める(自ら発電)。次年度38・7%、その翌年度は20%(8割削減)を達成。朝日新聞の「天声人語」でも取り上げられた。そんな野老さんも還暦を迎え、同社の舵取りは来春、長男にバトンタッチされる。